彼と彼女の世界origin

春野夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の世界origin

【Nコード】

N4701H

【作者名】

春野夜風

【あらすじ】

彼は彼女と出会い、彼女は彼に出会った。彼らが出会ったことで、止まっていた筈の、見えなかった筈のものが動き、姿を現す。9月29日現在、作者多忙のため連載が停止しております。出来る限り早めの更新をと心がけております。今しばらくお待ちください。

1：彼と彼女の世界（前書き）

作者の実力と構成上の問題で分かりにくいところも多々あると思いますが、楽しんでいただけると幸いです。

1：彼と彼女の世界

「先生、僕の目は何でこんなことになってしまったんですか？」

先生と言つてもここは病院でもなければ学校でもない。彼は医者でもなければ教師でもない。ここは彼の家。

「先生と呼ぶなといつも言ってるだろ……。まあ、いい。私の経験上、悪魔化、魔眼化、天使化、覚醒、とか色々があるけど、」

彼は一旦そこで止め、こう続けた。

「世界にそうあるべきと定められたのかもしれない」

「世界に…?」

「世界というのは結構不安定なものでね。そうだなあ、ものというのは眼で見て、神経を通して脳に伝達されて私たちは認識する。私たちの目はそれがその形、色でそれがそうだと認識する。しかし、それは私たちの脳がそう認識しているだけで実は全然違う形、色をしている可能性もあるわけだ。君が“視て”いる世界はもしかすると正しい世界なのかもしれない」

彼は、難しいことを言ってるけど、つまるところ私にもよくわからないということだね。と付け足した。

ただ、気をつけて。世界は異端を嫌うから。

「また何か夢を見ていた気がする…。まあ、どうでもいいか」

目覚めた彼は不機嫌そうな顔でベッドからおりる。

「朝飯…には遅いか。昼飯…には早いな…」

時計の針は11時20分を示していた。

「散歩にでも行くか」

彼は身支度を整え、玄関へと向かう。そこで杖を手に取り、ドアを開ける。立ち並ぶ家々、電柱、次々と走り去る車。その景色の中の何処にも“生き物の姿”だけがなかった。

「いつまで経っても異様な景色のままだな…」

彼の眼は特殊で、静物は映るが、“生物だけ映らない”という眼だった。正確に言うと、“死という概念が認識出来ない”ということとらしい。例えば生きていたとしても生と死は表裏一体の同じものであり、視界には映らない。最初からこうだったわけではない。ある日を境に段々と視界に入る生物が減っていき、最終的には静物しか映らなくなっていた。その為、外に出る時は盲人を装って杖を持って歩いている。そうすれば人は勝手に避けてくれるので、ぶつかる心配もない。

「先生は元気にしてるかな」

先生と呼ばれることを嫌う先生。年齢的には僕と2つしか変わら

ないことが原因なのかもしれないけど。

「また今度会いに行ってみようかな」

自分の眼ことを教えてくれた先生はわりと近くの学校に通っている。もちろん、生徒として。

そんなことを考えながら歩いていると視界の端にあり得ないものを視た。

「そんな筈は…」

そこには、女の人がいた。

「ちよつとすみません！」

あまりの衝撃にいきなり彼女の手を掴んでいた。

「え！？ 何ですか？」

急に手を掴まれた彼女は驚いて手を引っ込める。

「あ！ いきなりすみません！ えつと…僕はその…」

呼び止めたのはいいけど、何も考えてなかった…。何て言えばいいんだ？ 眼のことを説明すればいいのか？ それともこの娘が何者なのかを聞けばいいのか？

「アナタはもしかして世界に嫌われた人ですか？」

先生は昔言った。「世界は異端を嫌う」と。

「どうしてそれを…」

「ここで立ち話をしていると通行人の皆さんの邪魔になりますね。移動しましょう」

彼女に連れられて近くの喫茶店に入る。

「さて、早速本題に入りましょう。再度確認しますが、アナタは世界に嫌われた人ですか？」

「その前に確認したいことがあるんだけど、いいか？」

「どうぞ？」

アイスコーヒーのグラスを傾け、彼女は促す。

「自分から話しかけておいて可笑しな話だと思っただけど、君の対応は不自然だ。まるで僕のことを知っているように思える」

グラスをコースターに置き、彼の目を見る。

「なるほど。アナタの言うことももっともな話ですね。ではそれを説明するに当たって私のことをお話ししましょう」

彼女は持っていた鞆から紙を1枚取り出し、3本の平行な線を書いた。

「まず私は世界に見放された者。世界の軸から外れた者」

左の線に“生”真ん中の線に“人”右の線に“死”と書き、線の外の左側に小さく丸を書いてその中に私と書いた。

「産まれてから30歳くらいまでは大体の人は“生”の線の方にいます。しかし、歳を重ねる程に“死”へと近づいていきます。そして“死”に到達した時点でその人は死ぬのです。しかし、ごく稀に“死”から動かない人、“生”から動かない人、最初からずっと真ん中にい続ける人がいますけどね」

紙に言ったことを書き足していく。

「私は昔、越えてはいけない一線を越えてしまいました。それが原因で私は死という概念を世界に剥奪されてしまったのです」

真ん中の線から右の線までを消しゴムで消す。

「生と死は表裏一体。生物とは産まれて、生きて、死ぬ。それで1つです。つまり、生の概念を剥奪された者は産まれてすぐ死ぬ。だから生きていられない。死の概念を剥奪された者は産まれて、生きて、死なない。そんなものは生物じゃないとして生きていると認識されない。しかし、認識されないだけで存在はしている。さらに、死の概念を持たない不完全で不可解な存在は世界から弾き出される。世界から弾き出された時点でその存在は消滅する。でも、死ねない。消えることが許されていない。そんな矛盾は体を蝕み続ける。痛みを抱え続け、世界が消滅するまで生き続ける存在。それが私です」

彼女はつまり、死なない体で、そうなった時から生き続けてるってことなのか…？ でも、見た感じでは僕とあんまり年は変わらないうし、最近のことなのかも…。

「そして、私は世界の軸から外れたあり得ない生物。なので、世界の正しい軸の上にいる人には認識されないのです」

「じゃあ僕は君の言う軸から外れた人間ってことなのか？」

「そうでなければ自分は認識出来ない人間を認識していることになる。」

「いいえ。それは違います。実は認識出来ないと言うのは少し違って、記憶に残らない…と言いましょか。私の存在は空気と同レベルなのです。そこにいても誰も気にしない。気にならない。私は平行線上にいるんです。見ようと思えば見ることは出来ます。しかし、平行線上にいる人と交わることは出来ません。人は自分がいる軸の上しか見ることができず、同系列、同時軸の人間にしか干渉することができないのです」

例外は何にでも存在するものですが。と付け足す。

「何かややこしいな…」

「懇切丁寧に教えることが必ずしも分かりやすいとは限りません。簡単に例えますと、私は幽霊に近い存在なのです。私は肉体がある幽霊とでも言いましょか」

肉体がなく、見える人にしか見えない。さらに、世界に対して干渉することが出来ない。それが幽霊。彼女は肉体はあるが、見ようと思わなければ視界に入らず、僕らに干渉することが出来ない。

「つまり、私に関わることが出来たということは世界に嫌われた異端という結論に至ります」

「だからさも当然の様に僕の話しを聞く気になったのか」

「つまりそういうことですね。それで、アナタは私に何の御用なのですか？ いえ、用と言う程のことでもないのでしよう。まずはアナタのことを教えていただくのが早道ですね」

彼女に隠すこともないと思い、自分の眼のことを全て話す。

「なるほど。アナタは死の概念を見ることが出来ない。しかし、私は死の概念を剥奪されてしまっている。だから認識出来るのですね。そして、アナタは元の眼に戻りたいと」

「そうなんだ。何か知らないか？」

「私としてはお話しのお相手がせつかく出来たので、元に戻って欲しくないのですけど。それに、アナタは私しか見えなくて、私はアナタにしか認識されない。利害が一致していると思いませんか？」

彼女はそう言って妖しく微笑む。

「利害が一致って…。そうだな…すまない。君のことも考えず、自分勝手に言った…」

「え！？ ほんの冗談ですよ！ 本気に取らないで下さい！」

予想してたのと違う答えが返ってきたせいか、凄く慌てていた。

「ならこうしよう。君も元に戻る方法を一緒に探そう。そして、僕も元に戻る方法を一緒に探してくれないか？」

「アナタは面白いことを言いますね。私が今まで関わってきた人たちはそんなことを口にしませんでした。私が役に立たないと知るとすぐに去っていきました」

「それは酷いやつらだなあ。自分が困ってるからって自分のことしか考えていないなんて」

彼女は信じられないものを見るような目をしていた。

「アナタは凄いですね。自分がそんな状況なのに他人のことにまで頭が回るなんて…」

「凄いや？ そんなことないと思うけど。それに君も僕の話聞いてくれてるじゃないか」

「私は自分の様な人を見たくないだけですよ」

「僕も一緒だよ。僕は皆に助けられたからここにいられる。だから、困ってる人に手を差し延べてあげたいんだ」

彼女は、こんな人がまだこの世界にいたなんて…。と驚き、目を丸くしていた。

「是非、アナタのお手伝いをさせて下さい！」

唐突に手を握られ、今度は彼が目を丸くしていた。

「あ、ああ、よろしく。必ず君を元の軸に戻してみせる」

数多の世界の内の一つの何ということもない喫茶店で世界に見放された彼女と世界に嫌われた彼の約束は交わされた。

1：彼と彼女の世界（後書き）

評価・感想お待ちしております。
作者は飛んで喜びますよw

2：二つ目の終わりと三つ目の始まり

あの約束から1ヶ月経ちました。しかし、彼はまだ世界に嫌われた存在で、私は世界に見放された存在のままでした。

「なかなか手掛りが得られないね」

今は彼の家で次の作戦を練っているところです。

「そうですね。アナタの場合は死の概念が見えないから私と出会えたわけですし、私と同じように死の概念を剥奪された人なんて早々いないでしょうし…」

いてほしくもないですし…。

「こちらから見つけて接触するのはやっぱり難しいのでしょうか」

大っぴらに広めていいことでもないですし…手詰まりでしょうか。

「仕方ない…先生のところに行くことも考慮に入れていくしかないな」

あの約束の後、最初に向かったのは彼の先生の元でした。しかし、何の手掛りも掴めず、お互いに手掛りを探してからまた会おうと約束しました。だから、彼の先生のところに行くのは最終手段にしようと言っていたのです。

「アナタの先生はいつたい何者のですか？」

「君だから話すけど、先生は魔法使いなんだって。だから色々な世界を回ってるって言った」

彼が噂に聞く魔法使い？ 世界によって生み出され、創造主の予想を大きく超えた異業の持ち主にまで成長したが故に世界の手によって隠蔽された存在…。なら私の話を受け入れたのも納得出来ますけど…。そういえば…。え？ でも、それだと…

「難しい顔してどうかした？」

「私、気付いたことがあるんですけど、一つ確認してもいいですか？」

「ん？ 何だい？」

「アナタは…自分の体が視えますか？」

もし視えていたなら…

「そういえば視えてるね」

やっぱりそうでしたか…。

「いいですか？ 落ち着いて聞いて下さい。もしかするとアナタは死の概念を持っていない可能性があります」

「え…？」

考えうる限りの最悪な状況かもしれませんね…。

「これは一つの仮説ですが、死の概念が見えないアナタが自分自身を視ることが出来るというのはそういうことかもしれません。もう一度言いますが、落ち着いて聞いて下さい。大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

やっぱり、ちょっと混乱してますね。話しを急ぎ過ぎたかもしれません。

「アナタは私と同じ軸いたから私に干渉出来たのかもしれませんが、しかし、それに関して不自然なことが一つあります」

「不自然なこと？」

それでも食い付いてきますか。やはり私の目に狂いはなかったようです。

「アナタの先生ですよ。アナタが死の概念を持っていないなら、彼が世界に嫌われた異端でない限り、アナタや私に干渉出来る筈がないのです」

「……僕が世界に見放された者だって言うのか？ それに、先生が何か隠しているとでもいうのか？」

全てを知るまで、ただの可能性なんかに潰されてはいけませんよ。アナタなら出来る筈です。

「アナタがそうであるとは限りません。アナタの眼なのだから、自分自身は視えて当然なのかもしれません。そこははっきりしないのですが、彼が何かを握っているのは確かです。彼は私を認識してい

ました。アナタがどうであろうと彼は認識出来ない筈の私を認識していたのです。彼は魔法使いなどではありません。彼は世界に嫌われた異端です」

「で…でも、先生は魔法使いだから君が認識出来るのかもしれないだろ？」

悲しいことですが、信頼や信仰は時に自身を貫く刃に変わるので

「世界にとって、存在という概念は最も重要なもの。世界の内の人間でしかない魔法使いが、世界が定めたルールに干渉できる筈がないのです」

それが可能なのは神だけ。

「それにアナタは今までたくさん人に助けられて生きて来たと言っていました。アナタの性格を見てもそうです。世界に嫌われた異端ならそんな穏やかで強い心でいられる筈がないのです。私はこの体になってから色々な異端に関わってきました。皆さんは全員、誰もが心を擦り減らして消滅していきました。異端は世界の意思によって排除される。そういうシステムなのです。しかし、アナタはそんなことは全然ありません。つまり、アナタは世界に嫌われた異端なんかではありえませんか」

しかし、その前提条件を覆すとなると…

「じゃあ、僕はいつたい…何者なんだ？ 僕のこの眼は何だ…？」

必ずそこに当たってしまいます。

「それを今から確かめに行きましょう。アナタはそれを知らなければならぬ筈です」

「こんな形でここに来るとは思ってもみなかったな」

彼らがいるのは先生の家の前。

「ここからはそれ相応の覚悟が必要になります。しかし、アナタなら大丈夫だと信じています」

「大丈夫さ。僕は君を元の存在に戻してみせるって約束したからね」

彼らが決意を固めた直後、ドアの向こうから先生が姿を現す。

「やあ、久しぶりだね。何か分かったことはあったかい？ …何かただならぬ雰囲気だね。どうかしたのかい？」

「先生は… いったい何者何ですか？」

これで正直に答えてもらえるとは思っていません。しかし、私たちには知る権利があるはずです。

「私は魔法使い。世界によって生み出され、創造主の予想を大きく超えた異業を持ったが故に世界の手によって隠蔽された存在。昔も同じことを答えた筈だけど？ 言ってなかった？」

「では、ここに居る彼女が視えていますか？」

魔法使いなら私が視える筈がないのです。

「見えてるけど、それがどうかしたのかい？」

そこで彼女が一步前に入る。

「失礼ですが、私は世界にそう定義された存在にしか認識出来ない筈です。彼のように特殊な能力を持つ存在でない限りは。もう一度聞きます。アナタは何者ですか？ それに上乘せして、彼の眼について教えてもらいます」

「君はとても頭が良いね。だけど、頭が良すぎても損をするだけだ」

先生は彼女に銃口を向けた。しかし、彼女は涼しげな顔のまま。

「伊達に永く生きていませんので。さあ、答えて下さい。アナタは何者で、彼の眼は何なのか」

「いいよ。そこまでたどり着いたなら教えてあげるよ。私は世界に見放された存在さ」

やっぱりそうでしたか……。私と同じ存在だから私にも彼にも干渉出来たわけですか。

「そして彼は、私が創り出した最高傑作、世界が干渉出来ない存在。しかし、完成はしたものの、流石に完全に世界を騙すことは出来ないように、死の概念が見えないという細やかな抵抗をされたがね」

そんなバカな…。ただの人間が世界の掟を犯す存在を創造したと
いうのですか…？ そんなことが出来るはずが…

「…僕が先生に創りだされた？」

先生の言葉に彼は凍りつく。

「そうだよ。君は私が創り出したモノさ。出来ないと思うかい？
そんなことはないさ。生物を創造するというシステムはこの世界に
確実に存在する。それを否定すれば最初の生物が生まれたことに矛
盾が生じるからね」

「…本当なのか？ …本当にそんなことが可能なのか？」

覚悟したつもりだったのですが、実際に直面してみると辛いもの
ですね…。

「…理論上では可能です。しかし、本来ならその行為は世界が拒絶
する。実行出来ない筈なのです」

そう…不可能な筈なのです。

「それじゃあ…僕は…いつたい…」

「世界には無限の可能性があります。だから今まで人間は文明を発
達させることに成功しているのです。私が知らないだけで、確実な
方法があってもおかしくはありません…」

「そう。その方法を君は知らなかった。だから失敗した。だから世

界から弾き出された」

え？ どうしてそれを…

「どうして知っているのか知りたいという顔だね。私が彼を創り出す際に使用した方法は君が見つけた方法に世界に対する盾を付加したもののなさ。何の因果か、見つけてしまったのだよ。君の研究資料を」

「私の不完全だった方法を完成させたと言つのですか…？」

あれは嚴重に封印した筈…。いや、時間が経過すればそんなものは関係なくなりますね…。

「どういふことなんだ？ 君が世界に見放された理由って…」

「そうさ。ここにいる彼女は私のように存在を創造しようとしたのさ。挙げ句に失敗し、世界から弾かれた」

これも私がしたことの酬いなのでしょうか。

「本当…なのか？」

「……… 本当です。私が世界の正しい軸に乗っていた頃、私は神のような研究を思いついてしまったのです。しかし、そこには大きな穴がありました。存在を創造するのは世界の意思にのみ許される諸行世界の危険分子と判断された私は世界から弾き出されました…。当時の私は愚かな研究者でしかなかったのです」

しかし、完成するまで世界が放置しておかない筈です。いや、し

かし、存在をステルス出来るなら…それでも完成してから世界に弾かれるのもおかしい。彼の虚言なのか…情報が足りていないだけなのか…。1つの可能性はありますけど…そんなことする理由が…。こんなときでも冷静に分析出来るなんて…永い時が私の心を狂わせたのでしょうか。それとも、元研究者としての血がそうさせるのでしょうか。

「アナタは何故、世界に弾き出されたのですか？」

「私は世界に弾き出されたわけではないさ。自ら平行世界に移ったのだよ」

あり得ないと思っていましたが…まさか当たっていたとは。

「何故そんなことをしたのか聞きたそうな顔をしているね。簡単な話しさ。私は世界の軸を確認したかったのさ。そして、死の概念が見えないというのは本当なのか知りたかった。ただそれだけだよ」

そんなことのために…世界の掟に触れたというのですか…？

「しかし、本来なら君を創り出すのは彼女だったのさ。その彼女と共に私の元に真実を求めに来るのだから。運命や因果というものは面白いものだね。さあどうする？ 君が信じたものが君をそんな身体にした張本人だったぞ？」

私が言えることではないですが、この人は狂ってる。当時の私が求めたものはこんなものだったのでしょうか？

「……僕は……」

彼を苦しめていた原因が私だったなんて…。皮肉なものです。

「僕は人間じゃないのか…？」

「いや、君は人間だよ。私がそう創造したからね」

自慢気に平然と言つてのけるとは…この方には倫理というものが
ないのでしょうか。

「でも！ 人間は創造されるものじゃないはずだ！ まるでロボッ
トじゃないか！」

彼の言葉の数だけ彼女の心に刃を立てる。

「いいのかい？ 自分の存在を否定しても。君はもう頼れるものが
ないぞ？」

自分が信じた先生は自分をこんな存在を創造し、信じた仲間が自
分が創造された原因だった。

「彼女も私も死の概念を持っていない。つまり殺すことは出来ない
ぞ？」

「君は…どうして僕を創ろうと考えたんだ…？」

…どうしてこんな状況で私のことを考えることが出来るのですか？

「…私がどんな思いで研究をしていたとしても、言い訳にしかなり
ません。今アナタを苦しめている事実は変わりません」

「それでも…君は先生とは違う気がするんだよ。温かい何かがあったんじゃないかって思えるんだ」

「アナタは何処まで優しいのですか…。その優しさが自分を苦しめているというのに…。」

「…私は家族を創ろうと思ったのですよ。正確に言えば、事故などで失われてしまった命を世界の記憶から呼び戻す。そんなことが可能なら悲しい思いをする人がいなくなると思っただけです。よく考えてみたら、それは人の命を軽視し、命の尊さを失わせる行為でした。しかし、それに気付いたのは世界から弾き出された後でした…。」

「まったく…我ながら滑稽な話です。失う悲しみを失えば人間に未来はないのですから。」

「やっぱり君は優しいな。僕には出来そうもないことで誰かを救おうと考えている」

「死んでしまったから呼び戻す。それは壊れてしまったから買い換えると言っているのと同じです。そんなもので誰かを救える筈がありません！」

「どうして笑っていられるのですか？ 自分が一番傷ついて、不安定な存在になり果てたというのに…どうしてアナタはそんなに優しくなれるのですか…？」

「ものは言い様さ。君が考えた方法なら確かに絶望した誰かを救える。それは確実だ」

「アナタは…凄いですね…絶望に落ちた筈なのに…私にはとても真

似できません…」

「約束したる？ 君を元に戻してみせるって。だから、僕は約束を果たさなければいけない」

「たったそれだけのことで…？ アナタがそんなのに私がしつかりしないわけにはいきませんね。」

「私は元の軸に戻ろうとは思っていません。これは自分が犯した罪の清算ですから。私はアナタの魅力に惹かれ、アナタの眼を戻してあげたいと思ったのです。今までなら情報が少な過ぎて不可能でした。しかし、真実を知った今なら出来る」

「私の研究がベースになっているなら出来る筈だ。私が作ってしまった過ちなら、私が全ての責任をとる。」

「ふむ、私は君を人間として創造した筈なのだが、君の強さは人間のそれを越えている。研究する価値がありそうだ」

「今まで傍観を決め込んでいた先生が口を挟む。」

「私は彼を元の生活に戻すと決めました。邪魔はさせません。アナタは下がっててください」

「先生は銃を持っている。死の概念を持っていない彼女なら死ぬことはないが、彼は違う。」

「でも、それじゃあ君が！」

「大丈夫です。私も今まで何もしていなかったわけではありません。」

私はアナタを守る。そして、元の生活に戻してあげます」

彼女の決意を前にしては彼は下がるしかなかった。

「邪魔をするなら容赦はしない」

死なないとしても痛みは感じ、骨は折れるし、臓器は壊れる。それは普通の人間と変わらない。

「先生、言った筈ですよ？ 私は伊達に永く生きていないと」

彼女の雰囲気が一変する。

「私が自分の過ちに気付いた時、私は考えました。私と同じことを考えた者が出た場合、それを防ぐ方法は無いものかと。そして、永い研究の果てに完成させました。使うことがなければよかったのに……」

「面白い。見せてもらおうじゃないか」

同じ研究者として興味があるのか、そんなこと出来るわけがないと高をくくっているのか、先生は銃を下ろす。

「アクセス。情報を改変します」

彼女らを包む空気が変わる。

「な！ 何をした！」

「この世界の中に私とアナタしか干渉出来ないように私たちがいる

軸をベースに、世界を創造しました。私は元々、この世界に存在する個人の情報を呼び戻し、世界に反映させるということを目指しました。その成果がこれです。世界を構築するのはそこにある存在が持っている概念。空を飛ぶことなど不可能だと概念を固めてしまえば、不可能になり、飛べる筈だと概念を持てば飛行機のように飛べる。個人の情報はその個人に関わった人が持っています。つまり、世界の情報はその世界に関わった全ての存在が持っています。たった一人を解析し、繋がった者を解析すれば、それは世界を解析したも同義。私は世界の全てを解析し、データ化することで全てを掌握しました」

彼女の身体からは汗が吹き出し、息は上がり、視界はぐらつき、足元はおぼつかない。世界を背負うのは個人には負荷が大き過ぎる。それでも立っていられるのは彼女の研究成果だ。

「世界を掌握だと…そんなことが出来る筈が…」

「出来ると信じれば不可能はありません」

限界は人が勝手に決めたものだから。本当は限界なんてないのに。

「先生、アナタは私が生み出してしまった神の諸行に触れてしまった。悪魔の囁きに耳を傾けてしまった。アナタは知らないでしょうが、彼の存在は世界に小さな歪みを与えている。罪は償っていただきます」

彼女の身体から血が吹き出す。身体が悲鳴を上げている。それでも彼女は怯まない。

「予想以上に負荷が大きいですね…。時間がないようです。もう終

わりにしまし
よう」

「私の情報に到達するのにどれだけの時間がかかるのかな？ それまで君の身体が持つのか？」

彼女が言ったように一人をたどって全てを構築する世界にアクセスするのなら先生の元にたどり着くまでには相当のタイムラグがあるはずだ。

「私がこれを発動させた時、彼をベースに世界にアクセスしました。アナタに唯一干渉出来た彼からなら即座にアナタの情報にたどり着きます」

少し考えればわかることだ。彼女が干渉出来るのは彼が先生のみなのだから。

「この世界を放棄します」

彼女の一言と共に先生は消滅してしまった。この世界を構築しているのはそこに存在した彼女と先生だけなのだから。

同時に、彼女が創造した世界が崩壊を始める。彼女が創造した世界は彼女たちがいた世界の軸をベースに創りだしたものだ。つまり、世界が崩壊すれば彼女は存在出来ない。しかし、死の概念を持たないために、ただの概念として時空をさ迷うこととなる。

「間に合った…。彼の眼の情報を書き換えます」

彼の情報をベースに彼の母親の情報から眼が正常だった頃のデータを参考にし、彼の情報に反映させる。

「これで全て終わりました。お元気で」

彼女と彼女の世界は、消滅した。

優しく頭を撫でる感触がする。

優しい声が聞こえる。

彼の声。

私は概念として時空をさ迷う筈では…。

「早く起きなよ。こんなところで寝てると風邪引くよ?」

彼女は目を開けた。

「おはよう」

そこにはいる筈のない彼が、あるはずのない世界があった。

「…どうして?」

私がここにいるはずが…

「君がいなくなった途端に頭の中に君の声が響いていたんだ」

そうか、私が彼を起点として世界にアクセスしたから…。

「僕は君と約束した。君を元に戻すと。だから、考えた。どうすれば君を救えるか。そしたら君の言葉がヒントをくれた」

「ヒント？」

「僕をベースにして世界にアクセスしているなら、僕も世界に干渉出来る筈だと考えたんだ」

だから私の計算よりも負荷が大きかったのですね…。彼をベースにしても処理を行うのは私。2つのことを同時に行なっていたことになるのですし。

「よく思いつきましたね」

おかげで予想以上に辛かったですよ。まあ、今こうしていられるのだから結果オーライとしますか。

「1ヶ月も君といたから難しい考えがうつつたのかもね」

やっぱりアナタは凄いですね。

「今更なのですけど、眼はどうですか？」

「勿論、よく見えるよ。鳥が飛んでいたり、猫が眠っていたり、こんな景色を見るのは久しぶりだよ。君に感謝しないとね」

「元はと言えば私の引き起こしたことですけどね…。それで私が認識出来るということは、約束を果たしてくれたのですね」

私はずっとあのままだと思ってたのに…。

「じゃあ夜になると寒いし、そろそろ帰ろっか」

「私みたいな者がこんなハッピーエンドでいいのでしょうか…?」

私には彼のように温かい人に触れている資格はないのではないのでしょうか。

「じゃあ、新しい約束をしないか?」

彼は唐突にそんなことを言います。

「新しい約束ですか?」

「ああ。僕は、僕らみたいな存在が生まれないように何かしたいと思ってるんだ。けど、僕一人では何が出来るのかわからないから」

彼は私に手を差し出します。

「僕と一緒に考えてくれないか?」

…アナタは眩しすぎるほどに素敵な人ですね。

「喜んで」

私は彼の手を取りました。

2：…1111目の終わりと111111目の始まり（後書き）

如何だったでしょうか。

評価・感想をお待ちしています。

3：彼と彼女の世界EX（前書き）

第2章の始まりです。

3：彼と彼女の世界EX

「君の研究がいったいどんなものだったのか教えてくれないか？」

彼は唐突にそんなことを言いました。

その後　彼と私が元の世界軸で普通の生活が出来るようになった後。私たちは2人で活動を始めようと決めました。

元々、家もあり、家族もいて、学校に通っていた彼は眼が元に戻ったという嬉しい事実があるだけで特に何の問題もないと思われませんでした。

しかし、彼を“先生”が生み出したというなら彼が両親だと思っていた人は何者なのか。彼が生きてきた世界は本物なのか。彼の記憶は本当に経験からくるものなのか。先生に創り出された幻想なのではないか。先生という存在が消えた今、彼の存在そのものが揺らいでしまった。

一方、私も問題は山積みです。私は家もなければ家族もおらず、死んでしまう体になり、世界の主軸に乗ってしまったために生きるための活動をしなくてはならなくなりました。私はそう簡単に死ぬわけにはいきません。彼に救ってもらった命で生きる限り生きて、決して消えない罪を償い続ける義務があります。

だから、雨風を凌げる家、生きていくための食料、生活するお金が必要になりました。しかし、家も身元を保証するものも身元を保証してくれる人も仕事もお金もない私では、この身1つで世界の主軸に乗ってしまった私では今の世界で生きていくことはできません。今の私たちは極めて不安定な存在となりました。

まずは目の前の問題から解決しないとイケません。

「私の研究は世界の記憶から事故などで死んでしまった人の情報を呼び出し、その人の情報を今の世界に上書きします。そして、その

人が本来生きる筈だった時間を再生するというものです」

「なら、その研究は完成しているのかい？」

「完成していますが、何をするつもりですか？」

彼が望むのは恐らく

「僕が何者なのかを世界の記憶から探したいんだ。同時に、僕の家族のことも……」

やはりそうなりますよね。

「けれど、それは……」

「わかってる。それが僕にとって必ずしも良い結果を生むものではないということは。そして、それで僕は今までの全てを失うかもしれないということも」

もし、彼が培ってきたことが先生の創り出した偽りなら彼は全てを失う。

「それでも、知りたいんだ。いや、知らなければいけない。そうしなければ僕は前に進めない気がするんだ」

相変わらずアナタは強いですね。でも、そこまでして前に進む必要はあるのですか？

「酷なようですが、知ってしまえば高い確率でアナタは全てを失うでしょう。ただ、私の憶測ですので確証はありませんが」

これ以上アナタが何かを失う必要はない筈です。罪人はアナタではなく、私なのですから。

「アナタが望むなら全てを忘れて今まで通り過ごせるようにすることも可能です。その方が幸せのはずです」

アナタが幸せに過ごしてくれることが業を生み出した私の救いなのです。

「確かにそれも幸せなのかもしれないな」

アナタには普通の幸せを持ってもらいたい。何てことない日常が何よりも幸せだということはアナタも知っているはずですよ。

「でも、そうしたら君はどうなる？ 僕が全てを忘れて幸せを望んでしまったなら間違いなく君は死んでしまう。そんなことは僕がさせない」

アナタはそういう人でしたね。強くて優しい人。そんな人だからここにいる。そんな人じゃなかったならここでこんな話はしていない。

「私には世界にアクセスし、掌握する力があります。だから生きていくことは 「それは嘘だ」

え…？

「今の君には世界を掌握することはできない筈だ」

「何を根拠にそんなことを…」

「あれを生身の人間がすると、かなりの確率でショック死する。しなくても出血多量で死んでしまう。僕にそんな嘘は通用しないというくらい君ならわかる筈だ。どうしてそんな嘘を」

賢い人ですね。その賢さで私を困らせないでください…。

「アナタなら幸せになれる。だからアナタには幸せになってほしい。私はそう望んでいます」

「僕の幸せは僕が決める。僕はこうしていただけるだけで幸せだ。君は今混乱している。いつもの君ならもつと考えて行動できる」

アナタは賢い人です。この先に何が待ち受けているかはわかる筈です。

「しかし、結果は見えています。その結果を突きつけられれば、こうしていることもできなくなるでしょう」

「僕はまだ立ち止まるわけにはいかない。だから大丈夫。僕のような人を救うために、僕は前に進まないといけない。それに、君が協力してくれる。そうだろ？」

どうして笑っていられるのですか？ 私に手を差し伸べてくれるのですか？

「今までの全てを失ったとしても僕は1人じゃない。君がいてくれる」

「なら……」

私は全てを投げ打つてでもアナタのために動きます。それが私の生きる意味だから。でも……

「なら……アナタがこれ以上何も失わなくても私と一緒にいてくれますか？ 罪深い私と一緒に……」

私も希望はアナタしかいないのです。彼の言う通り、彼が居なければ私は数日たらずで死んでしまう可能性が高い。

「バカだなあ。君と一緒にいてくれないと困るんだ。僕1人では何もしないかもしれない。でも、君は多くを知っている。必ず何かができる」

アナタが私に利用価値を見いだしてくれるならそれでもいいのかもしれないね。

「それに、君は罪人なんかじゃない。自信を持つんだ。僕は君がいてくれたから生まれてこれた。僕は幸せだ。少なくとも今と今までには幸せだった。君がいるから救える命がある。君がいるからできることがある。君にしか出来ないことがある。後悔するのはもう止めにしよう」

アナタって人は本当に……

「君には感謝してる。もう一度、いや、何度でも言うよ。僕は幸せだ」

本当に素晴らしい人ですね……。

「私は…私は、生きていても良いのでしょうか？」

何を決意したとしても私を苦しめたのは私の研究。私にとってあれは罪の塊。死をちらつかせるに値する代物だったのです。あれは個人で成功できる程簡単なものではありません。それはつまり、“先生”のような人が数多くいて、彼のような人が数多くいるということです。“先生”は彼を最高傑作と呼んだ。全員が彼のような普通と何ら変わりない人間として生まれたわけではない。成功の過程には実験があり、失敗が必ず存在する。つまり、彼のように完璧に“人間らしく”存在してるのは恐らく…彼のみ。あれは神の所業で、悪魔の研究。それによって犠牲になった人が何人いることか…。

「なら、私が死なないように。後悔に潰されないように。私に新しい名前をくれませんか？ 私が自分を認められるまでの名前を」

そういえば、前の約束も果たされていませんでしたね。

「名前を？ いいけど、いきなり言われてもなあ」

「今すぐでなくても構いません。今は、アナタの真実を見つけにいきましよう」

「協力してくれるんだね？」

「はい。私には真実を知るまで背負う業があります。迷うこともあるでしょう。諦めようとすることもあるでしょう。でも、アナタが私を導いて下さい」

そう言って私は彼に手を差し出す。

「それが君に生きると言った僕の責任なら、喜んで」

彼は笑顔で私の手を取ってくれました。迷いなく。彼が私に自信をくれる。彼がいるから顔を上げられる。

「それが私たちの新しい約束です。それでは、行きましょう」

それが私たちの1つの終わりであり始まりでした。

4：彼（前書き）

ここからが連載初投稿です。
短編になかった新しいお話。
楽しんでいってください。

4：彼

「で、行くって、何処に？」

彼女が進む道を僕は後ろからついていく。

「今の世でもっとも情報が集められるものは何だと思いますか？」

彼女は先生を追い詰めた時のように覇気を持っている。完全に立ち直るにはまだまだ時間がかかるだろう。立ち直ることはできないのかもしれない。でも、彼女が満足する答えが得られるまで彼女と一緒にいよう。

「なるほど。なら、いい場所があるよ。次の角を右に曲がって」

少し行ったところ、建物が立ち並ぶ場所に出た。

「ここが噂にきく、難民避難施設ですか？」

彼女はもしかして…

「テレビ見て『箱の中に人がいる！』とか言わないよね？」

「テレビくらい知ってますよっ。受信料未納者がいっぱいいるアレですよっ？」

「際どいなあ…」。

「というのは軽いジョークとして、私は生きてる間、ずっと研究を続けてきましたので知識が偏ってるのは事実ですね。ですが、インターネット喫茶というのは難民がいるのでしょうか？」

まあ、間違っではないけどさ…。

「難民がいるなら助けてあげたいですねえ」

「難民というのは簡単に助けられるものじゃないというのは君も知ってるだろう？ それに、それは僕たちの目的とは違う。今の僕にはするべきことがあるんだ」

これだけは譲れない。僕が前に進むために。

「そうですね。助けられるなら国がなんとかしてるでしょうし。今はアナタのことの方が重要です」

「さて、入るよ」

彼女も僕に続いてネット喫茶に足を踏み入れる。

「中はこうなっているんですね。想像してたのと大分違います」

僕が受け付けを済ませている間、彼女はロビーを物珍しそうに見回していた。

「さて、部屋はここか」

「意外と広いですね。もっと窮屈なのを想像してました」

彼女は入ってからずっとキョロキョロしている。楽しそうだ。彼女が楽しそうに笑っているのはとても良い。ずっとこうしていられる世界が続けばいいのに。

「そういえば、君が笑うのを初めて見た気がする。やっぱり君は笑っていた方がずっと良い」

「笑ったのは何年ぶりでしょうか…。あなたのおかげですね」

パソコンが立ち上がったところで椅子を引き、彼女に促す。

「ところで、これをどうするんだい？ ハッキングとかするつもりじゃないだろうね」

「ハッキングはしませんけど、似たようなものかもしれません。私とネット回線を繋いで世界をリンクし、そこにある情報から世界にアクセスします」

口では簡単そうに言っているが、さっきからキーボードを叩く速度が半端ない。白かったり黒かったりする画面が現れては消え、現れては消えを繰り返している。

「見つけた…。これが、あなたのデータです」

画面に映し出されているのは自分の顔写真と名前、生年月日、血液型、出身校、国籍、などなど。色んな情報が書かれている。それは自分が知っている情報だった。

「これがそうってことは、僕は幻想を生きてきたわけではないとい

うことなのか…？」

彼女の肩越しに覗き込んでいた僕はさぞかし安堵していたことだろう。

「いえ、残念ながらこの情報はおかしいです。今調べたのですが、このデータだけ違和感…上書きされた痕跡があります」

「上書き？」

どういうことだ？ 僕は誰かの存在を乗っ取ったとでもいうのか…？

「これは良くない予想が的中してしまったようです。真実を知る覚悟は決まりましたか？」

「大丈夫。僕はまだ諦めるわけにはいかないから」

「そうですね。では隠されたデータを表示します」

そして彼女がエンターキーを押す。僕は息を飲む。

「これは…」

僕が見たもの。そこにはこう映っていた。

『No.0730、血液型A B、召還日時1810年1月1日0534、第7研究所、研究名G O D』

僕にわかるのはそれだけで、その下にはアルファベットの羅列があった。これは何を表すのだろうか。

「やはり、こうなってしまいましたか…」

「大丈夫。覚悟はしてた。だから思ったよりショックは少ないし正直に言つとちょっと堪えてるけど、僕は大丈夫。それに…」

「そうですか…。まだ調べることは残っていますが、どうします？」

「もちろん、最後までいくよ。お願いしていいかな？」

僕の家族のこと。もう調べるまでもなく、僕の全ては偽りの記憶だったわけだけど、

「すべてを知ってしまったんだな…」

鍵を閉めていた筈のドアがゆっくり開く。

「な！」

「アナタは？」

ゆっくりと足を踏み入れてくる男。

「これも運命だったのかもしれないな」

「父さん…」

男は僕の父。否、僕が父だと信じていた人。

「まだ私を父と呼ぶのか」

「アナタはこの研究に荷担した研究者ですね？」

え？ 父さんがこの研究に…？

「その通りだ。私は息子を作り上げた。それが罪だとわかっていても。私たちは子を望んだ」

「父さん、教えてくれ。どうして僕を…：父さんたちは理由もなくそんなことする人間じゃない筈だ！」

自分に疑問を持ち始めてから色んな人を見てきた。厳密に言えば、見えてはいなかったけど。それでも、父さんがこの研究に手をかける理由が見当たらない。

「そうだな。教えてやろう。オマエはな…：妻が死産した子なんだよ。それで母さんは子どもが産めない体になった。私たちは…：いや、アイツはオマエの命を救えなかったことで、病んでしまった。だから私はアイツに子どもを持たせてやりたかった。悲しみを消し去ってやりたかった」

「なるほど。理由としては十分ですね」

「だけど！ そんなこと！」

死産したからって…。でも、だから僕はここにいる。僕は否定することも肯定することもできないじゃないか…。

「ええ、そうです。死を曲げることは許されません」

「そうだ。許されることではないんだ。でも、アイツは幸せそうに笑ってたんだ。偽りでも、幸せそうに笑ってたんだよ！」

「そんな記憶を操作してまで得られる幸せなんて…本当にそれではないのですか？ それに、彼はそのせいで否定も肯定もできない。実の息子を苦しめてまで、幸せが欲しいのですか？」

「オマエに何がわかる！ 私は自分を偽り！ 妻を偽り！ 息子を偽った！ そんな私の何がわかる！」

「残念ながら私にはアナタのことはわかりません。それに…これは、まともな人間なら頭がおかしくなるような棘の道です。罪の重さに潰れそうだから助けてほしいなんておこがましい。それで喚き散らすなんて見苦しい。自業自得ですよ。自分が蒔いた種は自分で摘む。それが大人でしょう？」

彼女は父さんと自分を重ねているのかもしれない。自分がそうだったから相手もそうなるべきだと言うつもりなのだろうか。いや、逆だ。彼女は自分のような人を許しておくわけにはいかない。でも、見捨てることもできない。だから敢えて突き放す。差し伸べるだけが優しさではないと彼女は知っているから。

「いい気になるな！ オマエが何故この研究を知っているのか知らないが、私の苦しみを知った風な口をきかれるのは我慢できん！」

父さんは知らないんだ。彼女がこの研究の生みの親だということ。

「知っていますよ。知っているからここにいます。だから彼の力にな

りたいと思う。そして、」

彼女はそこで一呼吸置き、

「出来ることならアナタも救ってあげたいです」

優しいな。自分のことではいいっぱいなのにそれでも助けずにはられない。でも、多分それじゃダメだよ。君が潰れてしまう。だから、

「父さん。こんな研究もう止めよう。そして、前のように平和に暮らさないか？」

僕はそう口にしていた。

5：見えない思惑（前書き）

不定期掲載ご勘弁を

5：見えない思惑

「父さん。こんな研究もう止めよう。そして、前のように平和に暮らさないか？」

彼はそう言いました。そんなことをしても家族に疑問を持ち、溝が生まれ、家族が、自分が、自然に崩壊していく。単なる欺瞞。単なる時間稼ぎにしかならないとわかっているはずなのに。

「そうできたら幸せなんだろうな。だが、今更そうすることに意味はない」

「なら、この研究を、もう誰の目にも触れないように破壊しよう」
もう家族には戻れないとわかっていても捨てられないのでしょうかね。彼は家族を切り捨てられるような人ではない。でも、断絶するということは…

「それはこの研究に関わった者全てを殺すということだ。オマエにそれができるのか？」

根本から断ち切るには全てを無に返す必要があります。つまり、その意味することは、関係者の一掃。物理的にも彼の性格的にもそんなことができるはずがないのです。

「そうはさせない。そうならないで済む方法があるはずだ。馬鹿げてるかもしれない。そんな方法ないのかもしれない。甘ったれた考えなのかもしれない。でも、可能性がある限り諦めたくないんだ。」

みんなが幸せになる方法を」

自分の考えが甘いものだとわかっていながら、行き着く先に自分の幸せがあるかわからなくても、その道が辛いものだとわかっていても、誰かの幸せを願うことを止められない。みんながハッピーエンドになる方法しか納得できない。でも、アナタならそれが出来てしまう気がします。

「そうか…それは良いな。オマエらしい」

「だから、僕に協力してほしい。偽りでも良い。それで救われる人がいるなら。まだ戻れるはずだ。家族に」

「無意識かもしれないが、オマエは『まだ戻れる』と言ったな。それは今は家族ではないと認めているのと同義だ。そして、この世はいくら望んでも、それがどれだけちっぽけな願いでも、叶わない願いはかりだということを知ったほうがいい」

そんなことを今言う意味が…

「まさか！ マズいです！ 逃げて下さい！」

「え？ 何が…」

何故こんな当然のことに気がつかなかったのでしょうか。

「オマエたちがこの計画を止めるつもりなら、私たちはそれを阻止しないとイケない。もう後には戻れないんだ。悪いようにはしない。おとなしく捕まってくれ」

この計画を止めるつもりなら当然、研究者たちと対立することになる。彼の父親がここに来た時点で気付くべきでした。私たちは監視されていたのだと。今ここは広さもあまりない個室。包囲されたら終わりです。しかし、唯一の入り口は彼の父親に塞がれてしまっているし…戦うか、何とか逃げるか…

「仕方ないですね。ここは私が食い止めます。アナタはここから北に行ったところにある“friend”という喫茶店に向かって下さい。そして、オーナーに助けを要請して下さい」

彼女ならきつと、現状を打開できる筈ですから。

「でも！ それじゃあキミが！」

「大丈夫です。私を信じて下さい」

「…わかった。信じる。だから、また会おう」

相変わらず良い目をしますね。それなら大丈夫です。

「そんな大きな声で作戦会議したらこっちまで聴こえてるぞ。それに、逃げ道はない。だから、オマエたちは逃げられない」

「あまいですよ。逃げ道はあります」

「じゃあね。父さん、僕は諦めないから」

ドアが塞がれていても逃げ道はあります。窓から逃げればいいのです。

「逃げる際にはこれを使って下さい」

窓から飛び降りる彼に私の持つていた袋を投げ渡しました。ちょっと無茶かと思いましたが、彼は落下直前に見事にキャッチして視界から消えていきました。

「ここは3階だぞ！」

「上手く着地できるなら無傷で飛び降りることは可能です」

彼なら上手くやるでしょう。それはそうと、彼を逃がしたまでは良いのですが、ここを突破しないことにはどうにもなりません。彼を逃がしたことで相手の戦力を分散できたとはいえ、どうしたものが。

「では、彼が戻ってくるまで私とお話でもしませんか？」

「聡明な君との話は非常に興味深いが、そうも言ってもらえないのが現状だね。君は連れて帰れとの命令なんだよ」

「では、こんなのはどうでしょうか。私のポケットには爆弾がいくつか入っています。威力はそう高くないですが、一人一人くらいなら吹き飛びます。アナタが子を切り捨てたのも奥さんのため。ここで死ぬわけにはいかないはずですよ。幸いにも出口はアナタの後ろにあります。逃げた方がよくないですか？」

不敵な笑みを浮かべることを忘れません。

「まさか私がただ出口を塞がれただけでも思っていましたか？」

私が何者かを知っているならこの言葉で怯む筈です。

「私を敵にまわして一人で向かってくるなんておこがましいにも程があります」

この人は恐らく、感情に流されやすいタイプです。そして、彼一人がここにいる理由は…

「アナタ程度の人間で私をどうにかできると思われているのが遺憾です。ホントにアナタの上司は何を考えているのでしょうか。もう少し有能な人を寄越さないと私は捕まえられません」

流石にここまで人をコケにするのは気が引けますね…。まあ、そんなこと言っていられないですが…。

「言わせておけば言いたい放題言ってくれるじゃないか。私をそこまでコケにしたことを後悔させてやる！」

挑発に乗ってきてくれましたね。しかし、大事なのは次です。

「やはり、拳銃を持ってましたか」

持たされていると思ってましたが、実際持っていてほしくなかったです。危ないですからね。

「拳銃の使い方はわかりますか？ ちゃんと両手で構えないと当たりませんよ。下手なところに当ててしまつては私は死んでしまいますよ。爆弾も持ってますしね」

「五月蠅い！ 黙らないと撃つぞ！」

怒りで震えているじゃないですか。ちょっと挑発しすぎましたね。

「そんなでは当たるものも当たらないですよ」

「子どもがいきがるな！　これが怖くないのか！」

まさか、研究者たちには世界軸の話は伝わっていない？

「いや、多分私の方がアナタより長生きですよ？　知りませんでしたか？」

「黙れと言っている！」

やっぱり知らないらしいですね。でも、どうして…。

「さて、拳銃を下ろして下さい。危ないです」

「バカにしゃがって！」

どう考えてても情報が多い方が有利なのに。

「私も伊達にこの身体で長く生きていないですから。拳銃は私には当たらないと思います。拳銃より肉弾戦の報が効果があると思いますよ。何なら撃ってみて下さい。連れて行くつもりなら軸足、私の場合だと左脚を撃つのがいいでしょう。さらに言うなら太もも辺りがオススメです」

「黙れ！」

くっ…狭い部屋で銃声は耳が痛いですね…。とっさに耳を閉じなければ鼓膜が破れていたでしょう。

「なっ！ どうして当たらない！」

「簡単です。避けたからですよ」

実際に避けるのは難しいと思いますが。

「さて、これで私に銃がきかないのは理解してもらえましたか？」

ホントは乱射されてたら数発当たってたでしょうし、何処に撃ってくるか予めわかってたから避けられたのですけど。

「銃を捨てて降参してくれるのが一番助かるのですが、どうでしょうか？」

先ほどの銃声で騒ぎにならないということはここはもう占拠されてそうですね。警察も出てこないのは何か特殊な力が働いてそんな感じがします。となると、早く脱出しないとマズいことになりそうです。

「仕方ない…」

銃を捨ててくれますか。賢明な判断をして助かりますね。

「両手を挙げて後ろを向いて下さい」

何とか穩便に終わりそうです。まあ、拳銃を出した時点で穩便とは言えなさそうですが。

「どうしたのですか？ 降参してくれるのでは？」

「そうはいくか！」

仕込みナイフですか。まあ、武器が拳銃だけってこともないでしょうし、よくあることですが…捨て身はいけません。

「残念です」

彼が突進してくるのに合わせて鳩尾に回し蹴りをプレゼント。非力な人は相手の力も利用すれば強くなれるんですよ。

「物理的な法則は絶対ですからねえ。今は痛かったですでしょう？ だから降参してほしかったのですが」

床に落ちている銃を拾い、うずくまっている彼の額に当て、お終いです。

「チェックメイト。ですね」

さて、後は彼の帰還を待つのみです。まあ、直に帰ってくるでしょう。

続く

6・救援要請（前書き）

気まぐれ更新でスミマセン。ちゃんと完結まで続きますので、長い目で見てやって下さい。

6：救援要請

「仕方ないですね。ここは私が食い止めます。アナタはここから北に行ったところにある“friend”という喫茶店に向かって下さい。そして、オーナーに助けを要請して下さい」

「でも！ それじゃあキミが！」

それではあまりに危険なんじゃ…。

「大丈夫です。私を信じて下さい」

…君はズルいな。そう言われたら信じるしかないじゃないか。

「…わかった。信じる。だから、また会おう」

「そんな大きな声で作戦会議したらこっちまで聴こえてるぞ。それに、逃げ道はない。だから、オマエたちは逃げられない」

逃げ道ならある。ただ、それを逃げ道とするには少し勇気がいるけど。

「あまいですよ。逃げ道はあります」

「じゃあね。父さん、僕は諦めないから」

ドアが塞がれていても、窓から逃げればいいのだから。

「逃げる際にはこれを使って下さい」

窓から飛び降りる寸前に彼女が袋をくれたけど、これはいったい何だろう。

「さて、困った」

飛び降りる前に下を確認しておけばよかったな。降りたら敵陣のド真ん中とは…。

「とりあえず、突破しないと。急がないと彼女が危ない」

僕か彼女、どちらが捕まっても終わりだ。幸い、そんなに人数は多くない。彼女は信じろと言った。そして僕を信じてくれた。だから、捕まるわけにはいかない。とりあえず、自分に何が出来るか考えないと。知ってる限りでは僕に特殊な力はない。取り立てて力が強いわけでも、足が速いわけでもない。

「ターゲットが落ちてきたぞ！ 捕まえろ！」

「動くな！」

まさか、こんなものが入っているとは…

「動く撃つぞ！」

彼女が渡してくれた袋の中身。それは、拳銃2丁、手榴弾1つ、閃光弾1つ。あと、注意事項と書いたメモ。とりあえず、撃つつもりはないし、撃てるはずもないからメモは逃げながら読もう。今はハッターで逃げ切る。

「僕も手荒なまねはしたくない。道を開ける」

銃を両手に持って威嚇しながら前に進む。もう少しだ。通してくれ。しかし、どうして相手は丸腰なんだ？

「僕が見えなくなるまでそこを動くなよ」

もう少し距離がほしい。走っても追いつかれては捕まってしまう。

「あんな子どもに銃が使えるわけがない！ 怯むな！」

マズい、気づかれた！ 逃げないと！

「怯んでくれただけでも上出来か。そうだ、メモを確認しないと」

“銃；威力はセーブしてあります。片手で撃てます。殺傷能力は低いです。当たると痛みは与えられます。銃声はそのままなので怯ませることが可能です。撃つときは耳を塞いだ方が良くもしません。”

手榴弾・ハツタリです。爆発はしません。

閃光弾・本物ではありませんが、一時的に目を眩ますことは可能です”

か。上手く使って逃げ切らないと。でも、これだけあれば何とかなりそうだ。

「でも、喫茶店って何処にあるんだ？」

さっきから結構走ってる気がするんだけど。

「いたぞ！ 捕まえる！」

「マズい、もう追いつかれた！」

「当たったらごめん！」

試し撃ちするくらいの余裕は欲しかったなあ。えと、撃つときは耳を塞ぐんだよな。

「来るな！」

っ！ 銃声ってこんなに凄い音なのか…。耳が…耳が痛い…。

「アイツ撃ちやがった！ 人気がないとはいえ真っ昼間だぞ！」

これで少しは怯んでくれる筈だ。

「あつ！ あれか！ friend」

喫茶 friend。間違いない。もう少しだ！

「もう少し速く走れたらよかったなあ。まあ言っても仕方ない」

手榴弾か…あとで回収しとかなないと大変なことになりそうだな…。

「こんなのはどう？」

「なっ！ 手榴弾だと！？ アイツなんでこんなもん持ってるんだ！ 狂ってやがる！ とまかく下がれ！」

……

「ダミーか！ やられた！ よく考えたらこんなところであんなもん爆発させるわけない」

なんかあの人たち、ただ雇われたチンピラみたいな感じがするな。マークされてたのに実際に追ってくるのが素人ってどういうことだ？ おかしなことが多すぎる。ともあれ、

「……はあ……疲れた……」

それにしても、綺麗な店だなあ。こんなこと考えてるあたり、意外と僕も余裕あるな。

「いらつしゃい。どうしたんだ？ そんな息を切らせて」

女の人……？ この人がオーナー？

「あ、あの、ここに来ればいいって」

「何があったかは知らんが、ちょっと落ち着いて。おーい新人ー！ ちょっと来てくれー！」

ここってバイトがいるのか？ 失礼だけど、こんな小さくて落ち着いた店なら1人でも良いと思うんだけど。

「なんすか？ 自分今休憩時間なんすけど」

え？ 男の子……？ どうみても小学生にしか見えないんですけど……。この店、大丈夫なのか？

「ちよいとただならぬ雰囲気のお客さんが来たから皿洗いよろしく」

「自分今休憩時間なんすけど」

「大事なことから2回言いましたっか！　ちよっとくらいいいじゃないか」

「自分今休憩時間なんすけど」

「重要なので3回言いましたっか！　わかったよ！　給料割増で出すよ！」

「皿洗いは任せとけっ」

何なんだろこの人たち…。

「で、お客さん、どうしたって？」

今日のシフト変更が成立したところでこちらに向く。

「僕たちに力を貸して下さい！」

「ふむ、それは　「ここか！　やっと見つけたぞ！　もう逃がさねえ！」

彼女が言い終わる前に追っ手が入店。子ども騙しでも場合によっちゃ結構使えるんだなあ。

「コイツらをどうにかしてほしいというのか？」

まだ状況説明も済んでないのに。この理解の速さは…。

「お客さん、店内ではお静かにお願いします」

彼女は僕を追いかけてきた男たちにそう促す。

「では、行こうか。新人、私は少しばかり出かけるからここは頼んだ」

「自分今休　「それはもういいよ！」」

新人と呼ばれている人を店に残し、僕たちは飛び出した。

「さて、詳しい話を聞こうか」

僕たちは今来た道を走って引き返している。彼女を助けるために、それにしても、

「敵が追ってこない？」

「どういうことだ？　追ってくる気配すらしない。」

「アイツら程度なら新人がどうにかしてくれてるさ。それより、これから向かうところには何があるんだ？」

大人3人をあんな小さな子ども1人で？　いや、ありえないだろ。

でも、実際追ってこないのだから、まあいい。今は彼女のことだけ考えよう。

「今から向かうのはネット喫茶です。とある理由から僕たちはある人たちに追われています。訳あって、ネット喫茶に行った僕たちは彼らに追い詰められてしまいました。彼女は1人でそこに残り、アナタのところに助けを要請するように言いました。だからアナタには彼女を助けて欲しいんです」

長い黒髪をなびかせ、横を走る彼女は顎に手を当て、『ふむ』と一言。

「わからないことだらけだな」

「すみません。助けを要請しましたが、できれば何も知らないままです。身勝手だとはわかっています。ですけど、それでもアナタを信じて、あえてお願いしています」

そして彼女は僕に、こう聞いた。

「その彼女とはどういった関係なんだ？」

話が続行されたということは来てくれると判断して良いのだろうか。どちらにしても、質問には答える。

「生きるために必要な存在。といったところでしょうか。もしくは、同志…でしょうか」

彼女はまた顎に手をあて、『ふむ』と一言。何か考えるときの癖なのだろう。

「生きるために必要な存在と言うのは、愛し合っているということか？　しかしそれだと同志と称するのは少し違和感がある」

この人、やっぱりただの喫茶店のオーナーじゃない。考え方が彼女に似ている。

「多くは言えませんが、互いの存在を正しく知っているということ。わからなくてもこれ以上は言えません。ただ言えるのが、現状では僕も彼女も、互いを失えば生きていくことはできないでしょう。恋人同士が言うそれとは違います。僕たちは互いがいなければ死んでしまう」

そう、僕たちは、少なくとも僕はもう彼女以外に頼どころがないんだ。彼女を失えば僕は途方に暮れて壊れるだろう。不安定な世界に立つ自分を理解してくれる存在がいることがこんなに安心できるものだとは知らなかった。それを失うのがこんなに怖いとは知らなかった。

「何故、君は危険な場所にわざわざ戻る？　もしかしたら、彼女は君を逃がしてくれたのかもしれないぞ？　そこまで多くを考えられる君ならそれを考えなかったわけではないだろ？」

考えなかったわけじゃない。彼女ならそれもありえる。だとしても、

「彼女が言った場所にアナタがいた。アナタは何も聞かないままに一緒に来てくれた。なら、彼女が言ったことは真実だ。だから、彼女が僕を信じると言ったことも真実だ」

彼女は例の癖をして、笑った。

「君は面白いな。今どき君のような人間はいないよ。だけど、君の根拠は穴だらけだ。君がそう思い込んでいるだけかもしれないぞ？」

彼女にも同じことを言われたな。でも、僕みたいな人なんていくらでもいる。ただちょっと不器用で、恥ずかしくて、表に出せないだけで。

「そうかもしれない。でも、彼女が僕を助けたいと思って逃がしてくれたなら、僕は彼女を助けたいと思っただけにいく。だから、真実なんて実はどうでもいいんです。僕が彼女を助けたい。それだけだから」

彼女は僕を見ながら呆れたような顔をして、

「君は格好いいな。姫を守るナイトのようだ」

そう言った。

「そんなことないです。僕は大切な人が危ないめにあっていたなら助けたい。大切な人だけじゃない。どんな些細なことでも、困っている人がいたなら手を差し伸べてあげたい。みんなそう思っている筈です。ただみんな不器用なだけで、少し勇気を出せないだけで。だからこれは普通のことです」

ただの自己満足なのかもしれない。実はそんなこと思っていないのかもしれない。

「その少しの勇気の“少し”の差はとても大きいんだ。当然のこと

のように実行できる君はやはり、格好いいよ。私には眩しすぎる」

「何か言いました？」

小さい声だったから何か言ったか聞こえなかった。

「いいや。それより、目的地はまだか？」

「もう少しです。次の角を曲がったところにあります」

流石に体力がもたない。話をしながら走るのは辛い……。心臓が破裂しそうだ。それに対してこの人は何でこんなに涼しげな顔をしていられるんだ？ この人いったい何者だ？

「少年！ 伏せる！」

彼女の声が頭に届いた時には僕は地面に叩きつけられていた。

「おい新人！ 何してる！」

続く

6・救援要請（後書き）

近いうちに一話目から修正をいれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4701h/>

彼と彼女の世界origin

2011年1月20日14時40分発行